

進路選択に見る属性と階層 ～被差別部落高校生の教育達成に関する調査研究（2）～

鍋島祥郎（大阪市立大学）

1、被差別部落高校生に関する先行調査研究

被差別部落児童・生徒の教育達成は長らく続いた長期欠席・不就学問題と非識字問題によって注目されはじめ、次第にその背後にある学力不振を含めた属性的なサブ・グループと教育達成に関する研究へと進展してきた。戦後行われたこの領域での学力調査は大小あわせて120ほどあるが（鍋島、1991、高田、1996、米川、1996）、これらの調査の大部分は小・中学生を対象としたものであり、就学前及び高等学校以降に関する調査は極めて少ない。また従来まで同和地区住民の教育達成を検証する指標として中卒後の進路が想定されてきたが、学歴インフレーションの進行にともない、社会移動と教育達成を考える上で中学卒業から高校卒業後の進路選択に至る移動空間が焦点化されなければならない。

また先行する調査統計はいずれも「同和地区奨学金」の受給者を対象としており、母集団からの偏りは否めず、また内容的にも断片的な教育達成状況の把握にとどまっている。

本報告はこのような問題意識に基づいて、1995年12月及び1996年3月に実施された『M県高等学校学力生活実態調査』の結果分析である。この調査は県下の高校3年生を対象として、「同和地区生徒」について悉皆（390名）、対照群として県下高校3年生数23,112名のうち20分の1抽出とし、学校・学科別に在籍生徒数に応じてサンプル数を配分した（合計1184名）。調査票は「生徒調査票」「保護者調査票」「学習状況等調査票（担任記入）」の三つで構成され、学校で配布・回収された。回収率は地区生徒85.4%、対照群92.7%であった。

この調査結果のうち、中学卒業から高校卒業後の進路選択に至る移動空間で、保護者学歴などに見る階層的属性と、同和地区出身生徒であるかないかという生得的属性が、教育達成にどのような影響を及ぼしているかについては、昨年鍋島によって報告されている

（鍋島、1997b）。今回は、保護者の養育態度（保護者意識調査結果）と子どもの進路選択との関係について詳しく報告する（資料は当日配布）。

2、高校卒業後の進路に対する階層的属性と生得的属性の影響

高校卒業後の進路に対して保護者の学歴階層や同和地区出身であるかどうかという生得的属性はかなりの影響を及ぼしている。保護者学歴について見れば、例えば、父中卒者全体の49.4%が就職するのに対して、父高卒者は30.1%、父大卒者は21.6%、父中卒者の四年制大学進学率は17.2%に対して父高卒者は34.2%、父大卒者は50.0%と、高卒後の進路は色濃く家庭の階層的条件に影響されていることがわかる。

高校卒業後の進路について、就職、各種・専門学校進学、短大進学、四年制大学進学を仮に序列尺度と見なし^(注1)、それと保護者学歴との間の相関係数を見れば、父学歴との間は0.301、母学歴との間は0.294であり、それぞれ進路の分散の8-9%程度を説明する。父母の学歴の間には0.515の強い相関関係が見られるが、両者と進路の間の重相関係数は0.341であり、同じく11-12%を説明している。

被差別部落生徒（以下、地区生徒）の特徴は、父高卒者生徒の就職率が全県（30.1%）と比べて45.3%と著しく高いことや、逆に、父中卒者・高卒者生徒の四年制大学進学率は全県の17.2%、34.2%に対して地区12.9%、23.6%とかなり少ないことがあげられる。総じて地区生徒の達成は、全県で見られた学歴階層的偏りよりもさらに「低達成」へと偏ることが観察される。

3、学歴・保護者の意識・進路の関係

保護者学歴と進路との関係と、地区・地区外の属性と進路との関係について検討してみよう。まずはじめに、保護者の学歴はどのようなかたちで進路選択に影響を及ぼすのであろうか。考えられる要因の第一は、保護者の学歴階層が子どもの学習条件に直接の有利・不利を形成していることであろう。そこで調査項目から子どもの学習条件に関わるものを取り出して、それと進路及び保護者の学歴との相関について見てみよう。

保護者の学歴と「暮らし向き意識」との間では、相関係数は父学歴で-0.118、母学歴で-0.119、進路と「暮らし向き意識」の間でも-0.078となっている。暮らし向き意識はあくまでも主観的な階層意識である

が、保護者学歴・家計・進路の間の深い関係は想像に難くない。例えば放課後に予備校または学習塾に通っている率と進路の間には0.389という強い相関が見られるが、同時に保護者学歴との間にもかなりの相関があり、こうした学習機会の確保に階層的不平等が生じているのかもしれない。

しかし生徒自身の消費財の保有状況と保護者学歴・進路との関係は、上記の解釈に疑問を生じさせる。進路と極めて強い相関を示すのはテレビ(-0.260)、ビデオ(-0.249)、ステレオ(-0.138)、テレビゲーム(-0.217)、ワープロ(-0.126)、ピアノ・エレクトーン(0.191)、電話(-0.125)、ポケットベル(-0.258)、勉強机(0.339)、勉強部屋(0.226)となっている。これらのうち、ステレオ、ポケットベル、勉強部屋を除いては、いずれも父・母の学歴双方に強い相関を有している。相関の正負の関係を見れば、達成水準の高い生徒ほど消費財を持っておらず、また高学歴の保護者ほど物を買って与えていないように見える。むしろ、お金の使い道はこれら消費財に限らず、塾・予備校・授業料など直接的教育投資の方が消費財よりずいぶん高い可能性があるが、それにしても高校生の生活は保護者の学歴水準に関わらず物的には恵まれている。教育達成への階層的影響はむしろお金の使い道、保護者の価値観との結びつきが示唆されている。実際に、子育ての心がけとして「進学に必要なお金をたくわえる」に対して保護者学歴はかなりの相関を有する(父-0.133母-0.104。学歴の高い人ほど進学資金をたくわえる。ちなみにこの項目と進路との間の相関は-.3501とすこぶる強い)。さらに、高学歴者が好んで買い与えるピアノ・エレクトーンに象徴されるように、家庭の文化的傾向の違いが見え隠れしており、いわゆる「文化資本」との関連での検討が課題となる。

そこで、保護者に対する意識調査項目と進路・保護者学歴との関係について検討してみた。紙数の都合上ここに詳しくその結果を記すことは出来ないが、学歴による子どもの将来像の違いでは、学歴の高い保護者ほど「国際的な場で活躍してほしい」に代表されるような社会的エリート育成志向が強いこと。また、学歴の低い保護者ほど「自宅から通える範囲で通学してほしい」など、家族中心の価値観が強いことなどが伺える。また、「将来お金の困るようなことがないかどうか心配だ」に代表される、子どもの将来に対する不安感は低学歴の保護者に強い。これらの傾向はいずれも子どもの進路との相関が見られる。これが進路の分散

に対してどの程度の影響を持っているかはこの調査の枠組みでは判断しかねる。また、「世の中の役に立つ仕事をしてほしい」に代表される、保護者の学歴とは独自に進路に対して影響を及ぼしている意識もあり、今後より綿密な分析が必要である。

4、地区中卒保護者と地区外中卒保護者の比較

地区生徒の絶対数が少なく、別集団としてサンプリングを行ったため、十分な解析を適用することはできない。そこで地区と地区外の父中卒者だけを取り出し、保護者の意識傾向の違いを拾ってみよう。

ここでも紙数の都合上細かい点は省略するが、進路に対して相関関係を有する中卒者に特徴的な意識が部落の中卒者でより強く現れる傾向をいくつか指摘できる。また、一般的な保護者学歴と保護者意識との相関関係と矛盾する傾向も見られる。^(注2) 学歴に関わらず進路に対して相関関係を有する意識で、部落中卒者に特徴的に現れるものがある。いずれにせよ、部落中卒者の意識傾向は地区外中卒者とは異なる点が多い。

注1：ここでは「就職進学」「進学待機」は欠損値として扱ったが、これらの層は「不明」を含めて9.4%を占めており、無視できないカテゴリーである。

注2：蛇足であるが、保護者学歴と保護者意識と相関関係が見られる項目は常に低学歴保護者が進路に対してマイナス傾向の意識を有しているわけではない。

文献

- 鍋島祥郎 1991、「戦後学力調査にみる被差別部落の子どもたち」『部落解放研究第78号』pp. 71-101
- 鍋島祥郎 1997a、「マイノリティ教育研究における集団文化論的アプローチ(1)～教育達成の集団差と養育プロセス～」大阪市立大学同和問題研究会『同和問題研究』19号
- 鍋島祥郎 1997b、「進路選択に見る階層と属性～被差別部落高校生の教育達成に関する調査研究(1)」日本教育社会学会『第49回大会発表要旨収録』
- 高田一宏 1996、「学力実態調査とこれからの学力保障」部落解放研究所『地域の教育改革と学力保障』、pp. 13-29
- 米川英樹 1996、「部落生徒の学力の現在」部落解放研究所『地域の教育改革と学力保障』、pp. 30-48